

自然保護の窓

1. 第23, 25回「ニホンザル」バイオリソース運営委員会出席報告

これまで「ニホンザル」バイオリソースプロジェクトの運営委員会には、学会からは保護・福祉担当理事あるいは幹事がオブザーバとして出席してきました。しかし、学会ではより積極的な関与が必要であるとの方針を決定し、第22回運営委員会（2012年3月1日）から、保護・福祉担当理事が運営委員として出席することになりました。今年度は、岡崎の生理学研究所で開催された第23（5月28日）、第25回運営委員会（8月31日）に出席しました。第24回はメール会議でした。

第23回運営委員会には、大井理事が運営委員として、河村理事がオブザーバとして出席しました。平成23年度の実績報告と平成24年度の事業予定などが議論されました。また、生理学研究所の飼育繁殖・研究施設「ニホンザルモデル動物研究センター」構想が紹介されました。第24回では、研究用ニホンザル供給のための募集要項が確認されました。第25回には、大石幹事がオブザーバとして出席しました。主に平成24年度のニホンザル供給の採択などについて審議されました。

なお、日本霊長類学会理事会は、第9回NBR公開シンポジウムの後援を決定しています。

（文責：大井徹・河村正二・大石高生）

2. 保全・福祉活動助成への応募状況

東日本大震災特別枠については、3件の応募があり採択しました。福島ニホンザルの会（申請者代表：大槻晃太氏）から申請された「放射線高線量区域に生息するニホンザルの遊動域利用と放射性物質による汚染状況の解明」に198,000円、宇野壮春氏（宮城・野生動物保護管理センター）から申請された「宮城県に生息する野生ニホンザルの放射能汚染に関する調査」に164,000円、仙台市八木山動物園（申請者代表：小野寺順也氏）から申請された「サル山環境エンリッチメント」に98,640円を支給しました。

平成25年度に応募も始めています。応募をお待ちしています。詳細は、霊長類学会ホームページをご覧ください。

（文責：大井徹・河村正二・竹ノ下祐二）

3. 第28回大会での自由集会開催について

名古屋市の椋山女学園で開催された日本霊長類学会大会において、7月6日、2件の自由集会を開催しました。1件は、「日本の外来マカク問題の現状と課題」、もう1件は、「東日本大震災の及ぼす野生ニホンザルの保護、管理研究への影響」です。詳細は別掲の報告をご覧ください。

（文責：大井徹・河村正二・竹ノ下祐二）

4. 日本霊長類学会の飼育実験綱領の作成

日本霊長類学会では、サル類の飼育管理、実験手続きについて動物福祉や倫理上の観点から研究者が遵守すべき態度について記述した「サル類を用いる基本原則」を1986年に作成しました。しかし、法改正や動物福祉に関する考え方の向上に伴いこの「基本原則」が古くなったので、新しいものが必要だという声があがりました。そこで保護委員会では、新たな「飼育実験綱領」を作成すべく、素案を議論しているところです。11月に本学会外の専門家による査読、12月に専門外研究者による査読を経て2013年1月の定例理事会で審議をします。その後、4月まで学会員へのパブリックコメントを行い、5月に最終版を完成させます。

（文責：河村正二）

5. IPS International Guidelines for the Acquisition, Care, and Breeding of Nonhuman Primates（霊長類の入手、飼育、繁殖に関するIPS国際ガイドライン）およびCode of Practice（実施基準）の翻訳について

保護委員会では、新たな「飼育実験綱領」作成の参考にすべく、国際霊長類学会が制定した「霊長類の入手、飼育、繁殖に関するIPS国際ガイドライン」およびその実施基準の翻訳作業を進めてきました（第11期担当理事：大井徹、川本芳、友永雅己、第12期担当理事：大井徹、河村正二、竹ノ下祐二）。このたび、この作業を完了し、国際霊長類学会のHPにおいて公表したので報告します（<http://www.internationalprimatologicalsociety.org/publications.cfm>）。

このガイドラインの目次を下記に示します。

1. はじめに
2. 野生霊長類の入手

- 捕獲方法
- 動物の保管と移送
- 給餌, 給水
- 病気
- 3. 国際輸送
 - 輸送前の飼育管理
 - 輸送
 - 受け入れ
- 4. 機関方針
 - 霊長類の飼育管理と利用スタッフ
 - 個人レベルでの衛生管理
- 5. 霊長類の居住環境
 - 社会環境とエンリッチメント
 - 飼育スペースの必要条件
 - 物理的環境
 - 衛生管理
- 6. 動物の飼育と健康管理
 - 動物の入手と検疫
 - 種別隔離
 - 施設, 設備, 人員配置
 - 個体識別と記録
 - 栄養管理
 - 給水
 - 獣医師による健康管理
 - (1) 獣医師
 - (2) 健康診断, 予防的処置, 予防接種
 - (3) 人獣共通感染症
 - (4) 痛みや苦痛の予防, 緩和, コントロール
 - (5) 手術などの処置
 - 行動面での健康
- 7. 飼育下での繁殖
 - 放飼場と野外飼育場
 - ハーレム集団
 - 一対一交配法
 - 家族集団
 - 子育てと離乳
- 8. 実験遂行上, 倫理上の留意事項
 - 身体拘束
 - 慢性痛
 - 麻酔と鎮痛
 - 給餌・給水制限
 - 実験個体の複数回利用

安楽死
リタイア

記載されている事項の多くは、国内で整備されているガイドラインにおいても述べられています（例えば京都大学霊長類研究所「サル類の飼育管理及び使用に関する指針」第3版）。内容の詳細については、会員の皆様へぜひ一度目を通していただくこととして、一点、本ガイドラインのユニークな点を指摘しておきたいと思います。それは、「実験遂行上, 倫理上の留意事項」として、実験参加後の個体の処遇について「リタイア」という項目を挙げて明記している点です。安楽死がエンドポイントとならない研究はこれまでも数多くなされてきましたが、そのような個体の処遇については整備が不十分なところも多いかと思えます。日本国内では、まだまだサンクチュアリのような実験に参加した後の個体の暮らす場所は充実してはいませんが、今後は、このような社会的要請にも配慮していく必要があるものと思われます。

現在、保護委員会では、この国際ガイドラインの翻訳作業を受けて、日本霊長類学会としてのガイドラインの見直し作業に入っています。広く会員の皆様からもご意見をいただければ幸いです。

なお、本ガイドラインの翻訳にあたっては足立裕子氏から多大なる援助を受けました。ここに記して謝意を表します。

(文責：友永雅己)

6. 公開シンポジウム「どうなる野生動物！東日本大震災の影響を考える」開催報告

2012年5月13日(日)に、東京大学理学部2号館講堂において、日本霊長類学会、日本野生動物医学会、日本哺乳類学会、野生生物保護学会の共催、環境省、WWF ジャパン後援で、公開シンポジウム「どうなる野生動物！東日本大震災の影響を考える」を開催しました。

シンポジウムの目的は、震災、放射線影響を含めた東北被災地域のニホンザルを含む野生動物の生息状況、保全上の問題点を整理し、情報を共有すること、これら問題点への学会からの支援の在り方を検討することでした。九州、北海道を含む全国から240名、立ち見ができるほどの参加者があり、この問題への関心の高さがうかがわれました。

講演では、地震や津波が沿岸部の生態系に広範で大きな影響を与えたこと、さらに原発事故により、より深刻で長期的な影響が懸念されることが、宮城県、福島県での調査事例とともに報告されました。野生動物への放射線影響の問題については、放射線暴露による繁殖や生存へ直接的な影響の他に、避難地域で人間活動がなくなり野生動物の個体数や行動が変化することにより、他地域の野生動物被害や住民の帰還時への影響が指摘されました。放射線汚染の研究には技術的に未確立な部分もあること、今後、生息地環境の線量や野生動物の被曝線量の精度の高い測定、評価を行うとともに、個体の染色体や遺伝子レベルでの影響、健康、繁殖、個体数の変化などを長期的観測する必要があることが指摘されました。さらに、生物多様性への影響という観点からも評価指標を作るべきことが指摘されました。

対策については、対策そのものがもたらす副次的な影響もあり、被災者、被災動物、社会全体が受ける利益と損益の収支や、自然観、生命観についての幅広い議論にもとづいて、選択すべきであることが主張されました。また、取り組みの継続のためには住民の利益や感情との調整が重要なことも指摘されました。

総合討論では、学会として、1) 被災地で発生している野生動物問題に継続的に注目していく必要があること、2) 調査研究および保護管理に係る活動ならびに人材育成を支援する必要があること、3) 特に、放射線影響については不明な点が多く、長期的なモニタリング体制を作ることが重要であること、4) 関連学会、関係機関および被災地住民との連携ならびに情報の共有に努める必要があること、5) 被災地住民に、野生動物問題に起因する風評被害が及ばないようにする必要があることが確認されました。今後、関係学会どうしの連携や具体的な対応を検討していきます。

なお、この研究会は京都大学霊長類研究所、京都大学野生動物研究センター共同利用研究会としても開催されました。

<プログラム>

1. 開会あいさつ 清水慶子（日本霊長類学会会長）
2. 基調講演：自然災害と野生動物の保護管理 松田裕之（横浜国立大学リスク研究グループ）
3. 被災地福島県における野生動物問題の現状と課題

大槻晃太氏（福島ニホンザルの会）

4. 被災地宮城県における野生動物問題の現状と課題 宇野壮春氏（宮城・野生動物保護管理センター）
5. 野生生物への放射線の影響について 久保田善久（放射線医学総合研究所）
6. 福島県における森林生態系内の放射性セシウムの分布 長谷川元洋（森林総合研究所）
7. 高線量地帯周辺における野生動物の生態・被曝モニタリング 石田健（東京大学大学院農学生命科学研究科）
8. パネル討論 座長 織田銃一（日本哺乳類学会会長）
9. 閉会のあいさつ 湯本貴和（野生生物保護学会会長）

実行委員会：大井徹・河村正二・竹ノ下祐二（日本霊長類学会理事）、坪田敏男（日本野生動物医学会事務局長）、山田文雄（日本哺乳類学会評議員）、吉田正人（野生生物保護学会事務局長）

（文責：大井徹・竹ノ下祐二・河村正二）